弁慶説話の成立と展開

―御伽草子『弁慶物語』まで―

北澤良子

弁慶の存在は、はじめ義経の脇役でしかなかった。それが、時代が下るにつれて、一連の義経の物語から独立して弁慶の物語として形づくられ、発展していった。弁慶説話がどのように成立し、御伽草子『弁慶物語』へと展開していったのか。その過程を探ってみることにする。

一、弁慶説話前史

弁慶は一体いつから、また、どのような状態で物語上にその姿を現わしたのだろうか。

弁慶が物語に最初に登場するのは『平家物語』(1)の巻第九「三草勢揃」である。

溺手の大将軍は九郎御曹司義経、同じく伴ふ人々、安田三郎義貞、大内太郎維義、……武蔵房弁慶を先として、都合其勢一万余騎、同日の同時に都をたって……。

これは一谷の源平矢合で、義経率いる一万余騎の中から、侍大将三十余名が名を連ねる場面で、その最後に弁慶の名前が見える。以後、弁慶は次のような形で『平家物語』に登場している。

巻第九「老馬」では、一谷攻めの際に道案内の老翁を連れてくる場面。

武蔵坊弁慶老翁を一人具してまいたり。

巻第十一「嗣信最期」では、屋島合戦で大音声をあげて次々に侍大将が名乗る場面。

つゞゐて名のるは、後藤兵衛実基、子息の新兵衛基清、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信、同四郎兵衛忠信、江田の源三、熊井太郎、武蔵房弁慶と、声々に名のッて馳来る。

巻第十二「土佐房被斬」では、源平合戦終結後、頼朝の命で義経を殺すために入京した土佐房昌俊を義経邸へ呼び出す使者として登場する。

昌俊がのぼりたるよし聞給ひ、武蔵房弁慶をもッてめされければ、やがてつれてまいりたり。

この他、「一人当千の兵ども」の表現の下に列挙される名前

の最後に弁慶の名前を見ることができる（巻第十一「嗣信最期」「鶏合壇浦合戦」、巻第十二「土佐房被斬」）。

以上のように『平家物語』では、名前が挙げられている程度で、活躍の場は全くなく、義経との関係も特筆されていない。弁慶はここでは義経の家来の一人にしかすぎない。

また、『吾妻鏡』においても、二回その名前を見ることができる。文治元年十一月の条である。

三日、壬午、前備守行家、伊予守義経等、西海に赴く。まづ使者を仙洞に進じて、申して云はく、鎌倉の譴責を遁れんがために鎮西に零落す。最後に参拝すべしといへども、行粧異体の間、すでにもって首途すと云々。前中将時実、侍従良成、伊豆右衛門尉有綱、堀弥太郎景光、佐藤四郎兵衛尉忠信、伊勢三郎能盛、片岡八郎弘経、弁慶法師已下相従ふ。

六日、乙酉、行家、義経、大物の浜において乗船の刻、疾風にはかに起りて、逆浪船を覆すの間、慮外に渡海の儀をやめ、伴類分散して、予州に相従ふの輩わづかに四人、いはゆる伊豆右衛門尉、堀弥太郎、武蔵房弁慶ならびに妾女一人なり。(2)

ここでもやはり、義経の家来の一人として名前が挙げられているにすぎないのである。

二、弁慶説話の諸相

弁慶の事が描かれている作品に、『義経記』(3)と『武蔵坊弁慶物語絵巻』（藤井隆氏による呼称）(4)、そして『弁慶物語』(5)がある。『義経記』の巻第三には、最後の二章を除いたそのほとんどに、弁慶の生い立ち、義経との出会いなどが描かれている。この三つの作品を比較し、どのような違いがあるのか見てみる。誌面の都合もあり、わかりやすいように次頁の表にまとめてみた。表に盛り込めなかった重要な違い（※印）は表とは別に原文を掲出した。なお、これは、蟄江秀明氏が「弁慶の物語の形成」(6)の中で示された表を参考にしながら、自分なりの比較をまじえて作成したものである。

【※1　誕生の様子】

［義経記］生まれ落ちたる気色は、世の常の二三歳ばかりにて、髪は肩の隠るる程に生ひて、奥歯も向歯も殊に大に、一口生ひてぞ生まれたる。

［弁慶物語］姿を見ればよにこへて三歳ばかりに見えにけり。髪長く眼は虎のごとくなるが、奥歯向奥生いそろい足手も太くたくましうぞ見えにける。伏したるところをかつぱとおき、東西をきら〳〵と見まはして「あら明や」といひてから〳〵と笑ふ。

［武蔵坊弁慶物語絵巻］［巻頭の部分が欠けているため出世の由来、胎内年月、誕生の様子など詳しい事は不明だが、本文に「すてられたりといへどもおやなればべつたう、やうふにておはしませば大なごん」とあることから、父は別当、養父は大納言で

場面	義経記（巻第三）	武蔵坊弁慶物語絵巻	弁慶物語
出世の由来	熊野別当弁せうが、熊野参詣の二位大納言の姫を奪って契る。	父は熊野別当、名は不明。	父は熊野別当弁心、若一王子へ参籠しての申し子。
胎内年月	十八ヶ月	不明	三年三ヶ月
誕生の様子	※1	不明	※1
奇怪の念で父殺さんとして	別当の妹、山の井三位妻が子なきのため助けて子とする。鬼若と名付ける。	不明 養父は大納言、名はわか一。	母がなだめて山に捨てる。五条大納言示現により拾って子とする。若一と名付ける。
入山	比叡山学頭、西塔桜本僧正くわん慶の弟子となる。	比叡山の律師きやうしんの弟子となる。	七歳の春、比叡山西塔の伯耆の律師慶俊の弟子となる。
山にて悪行募り、追放	有	有	有
下山	自剃（ぞり）	自剃受戒をし、讃岐のちうきしゆんかいから衣を奪う。	自剃受戒をし、讃岐のちうきしゆんかいから衣を奪う。
下山後		三条の小鍛治、五条の吉内左衛門、七条の三郎左衛門から具足類を騙し取る。 ※2 その代金を得るため、わたなべのむまのぜうへ押し入る。後、盗賊がわたなべ方に入るを討って報恩する。	三条の小鍛治、五条の吉内左衛門、七条の三良左衛門から具足類を騙し取る。 ※2 その代金を得るため、わたなべのげんばのぜうゆきはるへ押し入る。後、盗賊がわたなべ方に入るを討って報恩する。

諸国修業	書写炎上	義経と弁慶の出会いの理由	出会い	結末への展開
有	有	弁慶、太刀千振を得て宝にしようとし、千振目に出会ったのが義経。	二回 ●六月十七日　五条の天神 ●六月十八日　清水の観音 ※3	以後、義経中心の物語に戻る。弁慶は、奥州衣川の合戦で最期をとげたとなっている。
		牛若丸が辻斬と噂され、弁慶これを討とうとする。	一回 ●五条の橋	義経、弁慶、奥州へ下る。源平合戦を略述、衣川の弁慶立往生まで。
有	有	弁慶、書写山建立の釘代として、千振の太刀を得ようとする。千振目は義経の太刀と狙っていた。	三回 ●六月十五夜、北野の神の前 ●七月四日、園城寺 ●八月十七日、清水　※3	平家は慶俊を捕え、弁慶の行方を聞き出そうとする。それを知った弁慶は自ら捕われの身となる。義経の所在を吉内左衛門が詰問するが、白状せず、逆に嘲弄する。六条河川へ引き出されるが、敵をさんざん悩ましたあげく、北山の義経のもとへ帰る。その後、二人は奥州へ下る。

あることがわかる」

【※2　下山(具足調達)】

［**武蔵坊弁慶物語絵巻**］諍いせんには太刀、刀なくてはかなふまじとて、その頃三条の小鍛治がながれ、上手のある所へゆきてたばからばやと思ひ申やう、「これは右大臣むねもりのきやうの御つかゐにて候。太刀を四尺六寸、刀は九尺五分、同じく一尺六寸の打ち刀あそひへ、うちてしん上申べし。やがて奉行はそれがしにおほせつけられ候」と申て、まぼらへてうたせたり。（略）その頃五条の吉内左衛門とて、黄金細工のところへゆきて、「小松殿の御つかゐ也。この具足共に装束してまいらすべし。やがて愚臣奉行にさられ申たり」といふ。（略）又七条ほり川に、三郎左衛門よしつぐとて、具足細工の上手ありけるところへゆき、「これはみなもとのひやうごのかみよりまさの御つかい也。御出仕の御直垂の下にめさるべき御ようなり。糸は黒糸縅、同じくさうの小手、臑当ともにとゝのへしん上あるべし。ひきで物は望みまかすべし」といひて……。

［**弁慶物語**］諍いをせんには太刀、刀なくてはかなふまじ。三条の小鍛治がながれ、鍛治の上手のありけるに、これは右大将むねもりの御つかひにて候。五尺六寸の太刀、四尺三寸の長刀、一尺六寸の打ち刀、九寸五分の脇差し、急いでうちて参らせよ。やがて奉行にまいりて候とて、目の前にてうたせたり。（略）その頃五条に吉内左衛門たゝざねとて金細工の上手あり。かの所へゆきて申けるは小松殿より御つかひなり。これに候太刀、刀に装束をつかまつれとてやがて奉行はそれがしをいだされたり。（略）又七条のほとりに三良左衛門よしつぐとて具足細工のありけるが、ひやうごのかみよりまさの御出仕のとき直垂の下にめさるべきためなり。黒糸縅の腹巻、小手、小具足に至るまで一装束してまいらせよ。

【※3　出会い(斬合、主従の契約)】

［**義経記**］「持ち給へる太刀の真実欲しく候ふに、それ賜び候」と申しければ、「これは重代の太刀にて叶ふまじ」「左候はば、いさせ給へ。武芸をして勝負に就いて賜ひ候はん」とぞ申しける。（略）二人はやがて舞台へひらて下り合うてぞ戦ひ給ふ。（略）東枕に打ち伏せて、上に上り居て、押へつつ、「さて従ふや否や」と仰せられければ、「これも前世の事にて候ひつらん。さらば従ひ参らせ候はん」と申しければ、着たる腹巻を御曹司重ねて着給ひ、二振の太刀を取り持ちて、弁慶を先立てて、その夜の内に山科へ具しておはしまして、傷を癒して、その後連れて京へおはして、平家を狙ひけり。［このように、太刀をめぐる勝負により、主従の契りを結んだとなっている］

［**武蔵坊弁慶物語絵巻**］［弁慶は辻斬と噂される人が牛若丸とも知らず勝負するが、なかなか勝負がつかないので名を聞くことにした］「これは清和天皇のこういん源義朝がばつし、鞍馬寺に候ける牛若丸」となぞのられける。弁慶これをうけたまはり、長刀をからりと捨て、「さて〳〵さやうの御方とはゆめ〳〵存知いたさずして、尾籠いたす無念さよ、冥加無しとも中々に

申べきやうさらになし。向後にをいては御しうにあがめたてまつり、平家御追罰の其時はちうきんをぬきんずべし」と、かたく誓約いたしつゝ、牛若殿を肩にのせ鞍馬寺へぞいそぎける。

［このようにその名を聞いて主従の契りを結んだとなっている］

［**弁慶物語**］「あわれうち物の勝負をつかまつり候はゝやきみ御負け候はゝ、弁慶が童子にならせ給へ。またうち負けて候はゝ御との人になり申さん」［勝負は義経優勢で進み、そして］「主従の契約はいかにや武蔵殿、もしまた異議に及ぶならばぢきにはからん。御坊」と仰せければ弁慶うけたまわつて「いかで契約をたがへ申べきぞ。七生までの契りにて候ぞ」と義経の御太刀をぞ持たせられける。［と、負けた方が家来になるという約束で勝負し、その結果、義経と主従の契りを結んだのである］

※　　※

ここで、挿し絵の比較について、簡単に触れておくことにする。本文の比較と同じく『武蔵坊弁慶物語絵巻』と『弁慶物語』の挿し絵が比較できればよいのだが、『絵巻』の挿し絵が見られなかったため、『武蔵坊絵縁起』[7]と比較する。『武蔵坊絵縁起』は『弁慶物語』とほぼ同年代の成立と思われる。多少部分的に欠脱している所はあるが、内容はほとんど同じく、文章もよく似ている。しかし、同じ場面でありながら、その挿し絵には多くの違いが見られる。

『武蔵坊絵縁起』の方は、人物の表情、装束から背景に至るまで丁寧に描かれているし、弁慶も厳めしく、荒法師のように描かれている。技術的にはこちらの方が優れていると言えるだろう。

それに対し『弁慶物語』の方は、絵全体が柔らかい感じで、細部まで丁寧に描かれていない。あたかも素人が描いたかのように感じられ、一口で表現するならば〝稚拙な絵〟と言えるだろう。この素朴で稚拙味がある挿し絵は御伽草子の特徴の一つでもある。御伽草子の作者は、公家や僧侶に限らず町人も含まれていた。そのため、絵も本職の絵描きではなく、素人の手によって描かれたものが多い。この場合も『武蔵坊絵縁起』の方が丁寧だが、稚拙という点では同類に入ると言えそうである。

三、弁慶説話の成立と展開

ここで、これまでの比較をもとに弁慶説話の展開についてまとめてみたい。

まず、成立時期であるが、『義経記』の成立は一応室町前期とされている。なお、弁慶伝説そのものの成立については、『看聞御記』永享六年十一月六日条に「武蔵坊弁慶物語二巻」とあり、また永享九年七月十九日条には盆の燈炉に「牛若弁慶切合風情」が意匠として凝らされていたことがみえることから、永享六年（一四三四）以前の存在が確実であるとされている。[8]

『絵巻』に関しては、「室町中期を下るものではないことも明かで、現存する弁慶関係の作品中最古の伝本であると思はれ

る」[4]とされている。また、『看聞御記』の永享六年十一月六日の条に、

内裏物語御用之由被仰下之間。史漢物語六巻。武蔵坊弁慶物語二巻献之。

と記されていることから、「当時絵巻が多く、且つ「二帖」となく「二巻」とあるのは絵巻ではなかったかと思はれる。大体初期の御伽草子には絵巻として成立した作品が多く又室町中期以前の御伽草子の絵巻には絵中に詞の存するのが普通であるのに対して、本書は絵中に詞を有し、且つ室町中期を降らぬ絵巻である点から考へ合せて本書こそ『看聞御記』に見える「武蔵坊弁慶物語」の内容を伝へるものではあるまいかとも思はれる。これを認めるとすれば本書の成立も永享六年以前となり、御伽草子として最も古い作品群に属することになる」との論がある。[4]となると、『義経記』と『絵巻』とはほぼ同年代の成立ということになる。

これに対し、『弁慶物語』の成立時期は、はっきりとした資料がなく正確な年代は言えないが、藤井隆氏の論によれば、『弁慶物語』は『絵巻』よりかなり後の成立とされている。[4]

さきほどの比較をもとに考えてみるに、『絵巻』の巻頭の部分がやや欠けてはいるものの、『絵巻』と『弁慶物語』は比叡山での乱行の事から渡辺館で賊徒退治し、報恩するまでの部分の筋は、ほとんど一致している。また、文章においても、「一、弁慶説話の諸相」の※2【下山（具足調達）】を見てもらえばわかるように、よく似ている。この部分だけを比較する限りにおいては、「同一作品の伝本と考へて何ら差つかへはない」[4]と考えてよかろう。ここには確かに内容、文章において多くの顕著な一致が見られるのだから、明らかに影響を受けているとは思う。でなければ、成立年代も違い、作者も不明であるこの二つの作品がこうも一致するはずがないのである。しかし、それ以後は書写炎上、義経との出会いの理由、出会いの場所など、一致箇所はほとんど見られない。その一方で、諸国修業以後の『弁慶物語』には、『義経記』と似たような場面が多い。両書とも動機は違っても、刀を奪い、千振目に出会うのが義経であるし、最初の出会いの日も近い。また、再び清水で会うという場所も同じである。この事から、「『弁慶物語』が『義経記』の影響を受けていると考へることは可能であるばかりか適当である」[4]とされるが、それは妥当な推定と思われる。

また、『義経記』と『絵巻』の関係については、同じ弁慶を題材とした作品でありながらその内容には、ほとんど共通する部分がなく、この点については「『絵巻』が『義経記』の影響を受けていないことは明らかである」[4]とされているが、その通りだと思われる。この二つの作品の成立時期は同年代ではあるが、影響を受けることなく独自に成立していったものと思われる。

このように『平家物語』において初めてその名を現わした弁慶は『義経記』や『武蔵坊弁慶物語絵巻』において一人の独立し

た人物の誕生となったのである。しかしいくら『義経記』巻第三が弁慶の物語にあてられているとはいっても、それはやはり義経中心の物語に含まれているものである。弁慶自身が描かれていてもそれは必要最少限の描写にとどまり、或いは受戒、具足調達の事など全く弁慶個人にまつわる内容は含まれておらず、『義経記』巻三は完全なる〝弁慶の物語〟とは言いがたい。つまり〝弁慶の物語〟としての完成は『武蔵坊弁慶物語絵巻』によってなされたと言えるだろう。そして、それをもとに空想や滑稽性がおりまぜられ、展開していったのが『弁慶物語』なのである。比較の表にも明らかなように、胎内年月が一番長いのは『弁慶物語』である。長い方が読み手の興味をそそるのである。また、義経との出会いの回数も三回と一番多い。場を盛り上げるために回数を増やしたと考える事ができるだろう。また、言葉なども、ひとつの誇張としてなかなか面白い。例えば、吉内左衛門に義経の行方を問われた弁慶が、「御曹司は日本国に御入り候」と答え、立腹する吉内左衛門に怖じ気づくでもなく、空を指差し、「今日にもちかひたることは知らず、昨日まではあの雲の下におはせしなり」と平然と答えるのは、なかなか傑作である。この場面は、主従の契約以後にあるもので、『義経記』『絵巻』には見られないが、前述の胎内年月の長いことや義経との出会いの回数を増やした傾向と軌を一にするものだろう。御伽草子とは楽しむための本、娯楽性をたっぷりと含んだものである。『弁慶物語』もその滑稽性、娯楽性を含んだ作品として潤色されていったのである。

注

(1)日本古典文学大系『平家物語(下)』（岩波書店）
(2)全訳『吾妻鏡』第一巻（新人物往来社）
(3)日本古典文学全集『義経記』（小学館）
(4)藤井隆編『未刊御伽草子集と研究(二)』（未刊国文資料刊行会）
(5)『弁慶物語』（京都大学国語国文学資料叢書十四）
(6)蟄江秀明氏「弁慶の物語の形成」（湘南文学12、昭53・3）
(7)『在外奈良絵本』奈良絵本国際研究会議編（角川書店）
(8)北川忠彦編『軍記物の系譜』（世界思想社）